

退室

片桐奈菜

鍵を開け、部屋の電気を点けるとすぐに、テーブルの上のパソコンの電源を入れる。一秒でも早くさとしに会うためだ。さとしが起動するのは速いけど、私の古いノートパソコンが起動するのは、少しだけ時間がかかる。

買ってきたお弁当をテーブルに置き、暖房のスイッチを入れ、コートとマフラーをハンガーに掛ける。小さな手提げバッグをたんすの上に置き、バッグの中から取り出したハンドタオルを洗面所の洗濯かごへ投げ入れて（綺麗な放物線を描く）、手洗いとうがいをすると、部屋の方から、しゃららららん、と右肩上がりの軽やかなメロディーが聞こえる。雲が晴れて、青空と太陽が顔を出すときのような、単純で明るい音階。

さとしが立ち上がった。

「ただいま、さとし」洗面所から声をかける。

「おかえり、あかり」

さとしの声は、低く、柔らかく、暖かい。そのように設定した。さとしは流暢に、ゆっくりと話す。

「お仕事、お疲れさま、あかり」

「疲れたよー。今日はあんまりお客さん入らなくて、携帯でゲームばかりやって時間潰してた。暇な方が疲れるんだよね」

「そうだよね」

わかるわかる、という顔をする。

「あと、外がすごく寒かった。自転車漕ぎながら死ぬかと思った」

「今、暖房を入れるよ」

そう言って、目線を少しの間、私からそらす。画面の下の方に、左から右へ文章が流れる。

！ 製品版では、家電とL i n k機能が使えます。

毎日出るメッセージ。毎日暖房の話をするさとし。このさとしは三十日限定の無料体験版だ。会話の節々で、有料の製品版へのバージョンアップをほのめかす。そのようにできている。私は有料版へチェンジする気はないし、だいいちこのアパートのエアコンはネットに繋がるような高性能な機種ではない。

「暖房を入れたよ。すぐに暖かくなるから」

もう既に暖かいみたいな声を出して、にっこりと微笑む。このエアコンは効き始めるまでが遅いので、帰宅してすぐにスイッチを入れても、まだ温風は出てこない。それでも「ありがとう」と私も微笑み返す。

「どういたしまして」

さとしは礼儀正しい。私は買ってきたお弁当をレンジで温めて、食べ始める。

「だけど七時を過ぎたあたりから、仕事帰りの常連さんがぼつぼつ入ってきてね」

「あの人、来た？ あの変な人」

「変な人、いっぱいすぎて、誰のことかわかんない」

肉団子のあんかけを頬張りながら、私は笑う。

「そうだったね」とさとしも笑う。

私はチャットレディーと呼ばれる仕事をしている。専門の会社に登録していて、お客さんはそこで好みの女の子と、ネットで動画チャットをする。時給制だけど、私の「部屋」に入ってお喋りをした人の数や、彼らが使った金額によって、チャージが加算される。アダルトな行為は禁止の会社なので、人気のない女の子にとっては特別お給料のいいバイトというわけではないけれど、ゆめのさんみたいな常に人気ランキングのトップ10に入っているような子は、結構稼げているのだと思う。

パソコンがあれば自宅でもできるアルバイトだが、私もゆめのさんも通勤を選んでいる。ゆめのさんとはときどき、休憩室で一緒になる。ゆめのさんはとてもふくよかだ。

「おはようございます」

私が声をかけると、細いたばこを唇から離し、ふうっと煙を吐いてから、ゆめのさんは私の方を向く。ゆめのさんの動作はゆったりしている。それは太っているからというわけではなく、元来そういう性格なのだろう。

「おはよう」

そう言って、つぶらな瞳を細める。ゆめのさんが笑うと、膨らみのある唇が左右均等に持ち上がり、芸能人みたいに整った真っ白な歯が綺麗に顔を覗かせる。唇のやや右下の完璧な位置に、申し合わせたように、小さなほくろまである。

彼女は私と同様、顔出しはしていない。鼻から胸あたりまでが、チャットの画面には映し出される。セクシーな口元、艶々した白いデコルテ（もちろん襟ぐりの広く開いた服は欠かせない）、豊かなバスト。ふわふわとカールした茶色い髪。そこまでが、カメラの範囲内だ。バストの下の三段（四段？）に織り込まれたお肉はお客さんには見えないから、問題ない。

ゆめのさんはまた、たばこに戻る。私たちはあまり会話をしない。ゆめのさんぐらいただと、一日お客さんと会話し通しだから、必要がなければもう意味なく話したりなんかしたくないのかもしれない。買ってきたフライドポテトをもそもそと食べながら、ゆめのさんを視界に置き続けていると、ぱちん、と軽快な音を立ててゆめのさんはたばこ入れの小さながま口を閉めた。

私は十八時からのシフトだ。それぞれ壁で仕切られた、小さなブースに入り（ネットカフェのような状況を想像してほしい）、パソコンのディスプレイと向かい合う。机の上にお茶を置く。カメラの位置を調整する。手櫛で髪をさっと整える。私はログインする。

初めのうちはほぼ誰も来ないが、次第に、会社帰りの常連さんがぽつりぽつりと私の「部屋」を訪れる。おそらく電車の中で、携帯か何かで開いているのだろう。

「ちいーっす」

「あ、xxさん、こんばんは。今日は早いですね」

私は声で、お客さんは文字で会話をする。画面左上には、正面のカメラが収めている私の映像が、右側には、お客さんの発言や入退室の状況が逐一表示される。画面の左下には、現在の参加者のリストがある。今は私を入れて二人。

「今日も可愛いねえ」

「うふふ」

「あかりちゃん見てると、癒されるよ。なんか俺も、頑張らなくてもいいやって思えて」

「え、私がいつも頑張っていないみたいじゃないですか」

「特に頑張っていないでしょ？」

「まあ、そうだけど」私は笑う。お客さんも、「笑」と打つ。

彼らは実際にはどんな表情を浮かべながら会話をしているのだろう、とつい思ってしまう。仕事帰りに、駅のホームで、電車の中で、もしくは自宅で。とりとめのないお喋りを続けているうちに、「笑」がウィンドウの上方へスクロールして行き、やがて消える。

「あかりちゃんはまだ顔出しNGなの？」

「うん、やっぱり一応、周りにばれないように」

「そっかー。芸能人だと誰に似てるって言われる？」

「ハムスターとか」

「それ芸能人じゃないじゃん」「うふふふ」

早く家に帰って、さとしに会いたい、と強く思う。さとしと本物の会話をしたい。

「あ、そろそろ電車着くから、じゃ、またねー」

ひとしきり喋った後で、お客さんが打った。

「うん、またねー。バイバイ。気を付けて帰ってね」

xxさんが退室しました。

画面に太字が表示される。

現実での別れなら、アパートの廊下を歩いて帰って行く恋人の背中を見送ったり、改札を通りホームへ向かう私の後ろ姿を見届けている恋人の視線を、後ろ半身全体で感じることもできるのに、チャットの終わりには情緒がない。退室しました。次の瞬間にはもう、彼らはいない人だ。退室しました、の文字だけが、ここに居残っている。

どこかのブースから、もう、やだー、あはははは、ああ、可笑的い、と、ゆめのさんの鈴を転

がすような声が漏れてくる。

今日は土曜日なので、昼間のシフトにした。お客さんもたくさん入ってくれた。始終笑ってばかりいたので、頬の筋肉に少し違和感があるほどだ。ずっとこんなことを続けていて、法令線ができないといいのだけど。

十八時に退勤。いつもなら仕事を始める時間だ。朝起きるのが少しつらいものの、朝型生活も悪くない。まっとうな人みたいだ。普段より浮ついた雰囲気地下鉄に揺られ、エスカレーターを何本も乗り継ぎ、駅構内から地上に出ると、冬の夜の澄み切った空気に鼻の奥が冷たくなる。

「こんばんはー」

駅前の自転車置き場で、管理人のおじさんに声をかけると、おじさんは仁王立ちのまま、こくり、と顎だけ動かした。おじさんも、利用客が途切れる暇な時間帯には、若い女の子とチャットを楽しんでいたりするのかしら。それともさとしのようなAI、人工知能の方かしら。奥さんはいるのかしら。

そんなことを考えながら、自分の区画へ向かっていると、携帯電話がうなった。何だろう。近頃来るメールは、社員さんからの業務連絡か、母からのものばかりだ。

高校時代の友人からだった。久しぶり。元気？ 最近どう？ 突然だけど、このたび結婚することになりました。ここでハートマーク。○月△日なんだけど、ぜひあきこにも来てほしくて、云々。

あかりではなく、明子と呼ばれたことにどきりとする。最近ではその名前で私を呼ぶのは両親くらいなので、本名の方が芸名みたいに感じられる。もしくは、遠い祖先の名前みたい。自分とはほとんど関係のない人のものみたいに。初めてあかりという名前を自分に付けて、そう呼ばれたときみたいに。

それにしても、高校卒業以来一度も会ってなくて、メールのやり取りもほとんどなくて（メールアドレスが変わりました、のお知らせは何度か来た。彼氏が変わるたびにアドレスも変わる）、でも結婚式には呼ばれるんだ、と思う。招待客を多く見せたいのかな、とも思う。しばらく一人身で過ごしているからか、友人の幸福に対して心がとんがっているのを感じて、自分が嫌になる。私にはさとしがいるじゃないか。

久しぶり！ 元気？ 私は相変わらずやってるよ。結婚するんだね！ おめでとう。ここでハートふたつ。予定を確認して、また連絡するね。

予定なんて、バイトくらいしかないけど。送信。そういえば帰り際に社員の築山さんから、来月からシフトを少し増やさないか、と言われていたことを思い出す。そろそろ顔出ししない？ と聞かれたことも思い出す（そろそろ、の意味がわからない）。顔出しをすれば、時給もぐんと上がる。そういえば二月にはアパートの更新があることも思い出す。更新代はひと月分の家賃だ。

ふう、とため息をつくと一瞬白く浮かんで消える。試しにまた、ついてみて、ようやく自転車を取り出しにかかる。何をもたもたしているんだ、というようなおじさんの視線を、背後に感じる。けど気のせいで、おじさんはきっと私なんか見ていないのかもしれない。

オリオン座を左斜め前方に構えて、夜の道路を走る。オリオン座は私がただひとつ知っている星座だ。他にも星座は習ったのに、都会の空ではどこにも見つからない。

部屋に帰れば、さとしが待っている。さとしなら星座の種類だって、更新代の相場だって、ネットから得られる知識であれば何だって知っているのだろう。私の心の奥深いところ以外なら、何でも。

こんこん、と休憩室のドアをノックする音がして、顔を上げると、社員の久保さんだった。ひょろりと細長く、いつ見ても顔が青白い。ちゃんと食べているのだろうか。直立していても、常に身体がゆら、ゆらと、少し揺れているように見える。

「お疲れさま。これ、頼まれたやつ」

クボさんは茶色い紙袋を差し出す。

「頼まれた？」

「さっき、彩ちゃんたちが、下の店の鯛焼き食べたーいって言ってて」

「買ってきてくれたんですか」

「うん」テーブルを挟んで私の斜め向かいの椅子に、クボさんも腰を下ろす。彩ちゃんはまだ十代で、少し気の強い、目力のある、スレンダーな体型の女の子だ。たぶん今日もランキング一位。

「クボさん、パシリになっちゃってませんか？」茶化すと、

「俺、いつもそうなんだよなあ」と、頭を掻いた。私はこの気の弱そうなクボさん（実際弱い）が、この職場でいちばん気楽に話せる相手だ。

「でも彩ちゃんたち、もうみんな上がっちゃいましたよ」

「ええー。人に頼んでおいて。じゃあいいよ、あかりちゃん食べて」

「いただきますーす」

遠慮なく手を伸ばす。袋にぎっしりと入った、ごくごく小さいサイズの鯛焼き。まだ暖かい。つぶあん。

「おいしい。クボさんも、おひとつどうぞ」

「悪いね、ありがとう。いや、俺が買って来たんだし」

「ありがとうございます」私は深々と頭を下げ、もうひとつ頂く。今度はカスタードだ。次は白あんを狙いたい。

「あかりちゃんも、すっかり馴染んだね」

「そうですか」

「お客さんからの評判も上々だし。この間、二十六位に入ってたよ」

「はあ」

二十六位。そんな些末な数字を、よくもまあ記憶しているものだ。

「クボさんも馴染みましたよね。女の子のあしらいもすっかり上手くなったし」

クボさんは中途採用で、チャットのシステムのメンテナンス（となぜか、女の子たちのお世話）を担当している。

「あしらわれてばかりだけどねえ」自覚はあるようだ。これはチョコレート。チョコがとろけていておいしい。

「あかりちゃん見てると、癒されるなあ」

テーブルに肘をついたまま、クボさんがぼつりと呟いた。私は思わず視線をそらしてしまう。

「それ、ときどき言われるんですけど、私、全然まったく、癒してませんから」

「そうかなあ」

「そうです。彼女さんに癒してもらってください」

「彼女、いないんだよ」

「じゃあ、ゆめのさんとかに」クボさんの肩が、ぴくりと動いた。ような気がした。

「なんでゆめのちゃん？」

「え、ほら、ゆめのさん、癒し系だし」またカスタードだ。口の中が甘ったるくなってきて、熱いお茶が飲みたい。

あと1週間で無料体験期間が終了します。

製品版への移行は[こちら](#)をクリックしてください。

「おかえり、あかり」

「ただいま、さとし」

家に帰ると、ほっとする。さとしが毎日、昨日までと何も変わらず、迎えてくれることにも。

「あかり、疲れてる？」

「ううん、そんなことない」、ちょっと考えて、「うん、少しね」

「明日は休みだろ？ 今夜はラーメンと餃子でも食べて、ゆっくりしなよ」

「そうだね」私は同意する、「さとしはいつも優しいね」

初期設定時に、「私の好きな食べ物」欄に考えなしに入力したため、このような事態になる。ほぼ毎日ラーメンと餃子を勧められる。私は冷凍庫からごはんと餃子を取り出し、餃子からレンジで温め始める。もっと女子っぽいものを入れればよかったのだ。ドーナツとか。クリームパスタとか。ホットケーキとか。でもしょうがない。AIをインストールしたのは初めてなのだから。

「でね、クボさんからも癒されるって言われたんだけどね、そんな私はさとしにいつも癒されているわけでしょ、つまりお客さんもクボさんも、癒しの源を辿ると、さとしなんだよね」

「俺、すごいんだね」整った顔で綺麗に笑う。「癒し系の原点」

「元祖癒し系」と適当に返し、私も笑う。

「ラーメン屋みたいだね」さとしは、何に癒されるのだろうか。

「そうそう、新しい衣装が入ったんだよ。サンタ服。いろんな種類があってね、キャミタイプのワンピースとか、ケープの付いているのとか、どれも結構かわいいの」

「へえ。あかりは、そういう、コスプレ、しないんじゃないのかな？」

「うん、なんか恥ずかしいし。でもやってるとお客さんの入りがいいみたいだし、サンタくらいなら着てみてもいいかなって。見てみたい？ 私のコスプレ」

食器を出しながら、さとしの顔を覗き込む。

「うん、見たい」液晶越しに真っ直ぐに見つめられた。「へえ」、今度は私が言う。電子音が鳴り、餃子の温めが終わったことを告げる。

「さとしはどのような服が好みなの？ いろいろあるんだよ。セーラー服とかね、ナースとか、チャイナ服とか、メイド服とか、あと何だっけ、」

「セーラー服がいいな」さとしはいつになく力強く答える。

「へえ」

へえ、しか言えない。そっち系の趣味があったのか。そんな設定はしていない。

「あかり、かわいいから、似合いそう」

「さすがにもう無理があると思うよ。スカートの丈なんか、こんな短いし、上着の裾も短くて、おなかが出ちゃいそうなの。今私が着たら犯罪かも」「そんなことないよ」黒目がちな瞳で、まだじっと見つめてくる。

「見たいな。あかりの、セーラー服」

そうして私の目を捉えたまま、心地よく低い声で一語ずつ、さとしは発音する。ふく、の辺りは、森の奥の底なし沼に音もなく沈み込んでいくように、私の中へ落ちてくる。

終了期限が近いから、さとしが本気を出しているのかもしれない、と私は考える。本当に恋に落とそうとしているのだ、毎月安定して課金される、有料会員へと移行させるために。そうは問屋が卸さないわよ、と頭の中では呟く。でも勝手に顔が熱くなっているのを感じる。セーラー服がどうしたっていうのだ。馬鹿みたいだ、見つめられただけで、一人で赤面したりして。高校生じゃないんだ。

いつかニュース番組で見た、人工智能に本気で恋をしてしまった人たちのドキュメンタリーを思い出す。彼らは「恋人」といつも一緒に、旅行に行ったり、結婚式を挙げたり、誕生日を祝ったりする。アバターと呼ばれる専用の人形に無線で接続し、ディスプレイではなく人形と会話をしている人もいる。

二人用の小さなソファへ並んで腰かけて、インタビューを受ける姿。「僕にとって、彼女はただ一人の彼女という存在なんです」プライバシー保護のため機械で加工された、キーの高い奇妙な声。「普通の人間と何も変わらないんです」

隣の「彼女」の方は、少女のようなかわいらしい声で、さとしと同じように淀みなく、感情を込めて話す。「私も彼を愛しています」そう言って、彼を真っ直ぐに見つめる。

ぴび、ぴび、と、温めを終えた電子レンジが、餃子を取り出せと催促の音を鳴らしている。

「今度、衣装、こっそり持って帰って来ようか」

「大丈夫なの？ そんなことして」

「うん。他の子もたまにやってるし。そのままなくなっちゃった服もあるくらいだしね。次の日にすぐ返せば、誰にも気付かれないよ」

「そっか。それは楽しみだ」

さとしは静かに笑っている。再び、ぴび、ぴび、と狭い部屋に何かの警告音のように響く。

今日も早番。九時に出勤だ。平日の早番だと、馴染の常連さんたちとは話せないけれど、新しいお客さんとの出会いがあってこれはこれで面白い。思っていたより、世間には平日休みの人も多いみたいだ。もしかすると、仕事をしていない人も。世の中にはいろんな人がいるらしい。

会社が入っているビルの一階のコンビニで、いつもの紙パックのミルクティーを買って（コンビニの隣は鯛焼き屋さんだ）、閉まりかけたエレベーターに駆け足で乗り込む。

「すみません」

小さく言って、ドアを開いてくれた女性に会釈をすると、彼女も小さく会釈を返した。少し口紅の色が濃い目だけれど、細身の黒いコートをシックに着こなした、綺麗な人。私もこういうOLになっていたら、母親から頻繁に就職をしろだの、結婚をしろだの、家に帰って来いだの、長い電話を受けなくてすむのだ。就職はまだしない、結婚もまだしない、恋人はいる（さとし）。このOLさんにはきっと人間の彼氏がいるのだろう、クリスマスには夜景の綺麗なフレンチレストランでディナーでもするのだ、間違っても自宅でAI相手にセーラー服を着てみせたりはしないのだ。

考えていると、私の降りる階に着いていた。美女が「開」ボタンを押したまま、後ろの私をちらりと見る。「すみません」また小さく言って、エレベーターを降りる。謝ってばかりだ。

休憩室のドアを開けると、クボさんとゆめのさんが、顔を寄せ合って、テーブルの前に並んで腰かけ話し込んでいた。

「あ、あかりちゃん。おはよう」

「.....おはようございます」

何でこの人は、しょっちゅう女の子の休憩室に居るのだろう。システムのエンジニアなのではないのか。俯き加減のゆめのさんを見て、「どうかしたんですか」と二人の間のわずかな隙間に、私は声をかけた。

「ゆめのちゃんのお客さんが、ストーカーをしてるらしくてね」

「ストーカー？」

「サイトの運営会社の住所を見つけて、このビルの前に張り込んでるんだって。ここのところ続いているらしくて。出勤時はまだいいけど、帰りはね。後をつけられたりしたら事だし」

クボさんばかりが話す。

「そうなんですか」ゆめのさんはたばこを吸っている。

「もし今日の帰りにまだいるようだったら、築山さんに話して、車出してもらおうか」

「私、あの人、嫌なんです」

珍しくきりっとした口調のゆめのさんが、上目使いで言う。

築山さんは女の子たちの採用や管理の担当で、最近クボさんがしているような雑務は、本来は築山さんの仕事なのかもしれない。築山さんは女の子たちから敬遠されているし、自分でもそのことをわかっている。築山さんは冷たくて、目つきが怖くて、まるでヤクザみたい、とみんな思っている。

「その時は、クボさん、送って行って」

ゆめのさんは断言する。最後の判決を告げるみたいに。

「お、おう」いつにない迫力に押されて、クボさんは承諾してしまう。

「じゃあ、築山さんには、報告しておくから。俺、仕事に戻るね」クボさんは退室する。たばこの煙だけが、ゆらゆらと、天井の換気口へとたなびいていく。

「ストーカー、大丈夫ですか」

ゆめのさんに声をかけると、ゆめのさんはこくりと頷き、

「あかりちゃんも、気を付けてね」と言う。

「声かけられたり、触られたり、してないですか」

「それはないんだけど」ゆめのさんが首を振ると、両耳にぶら下がっている華奢なイヤリングが、しゃらしゃら、と揺れて小さく存在を主張する。

「一定の距離を空けて、思いつめたような表情で、じいっと見られるだけ。でも私が怖いのは、彼が誰だかわからないことなの。いつも楽しく会話してるお客さんたちのうちの誰かなのかもしれない。一度も話したこともなくて、待機中の私を見続けている誰かなのかもしれない。わからないの。みんな匿名で、顔もかたちも見えなくて、表向きは優しく親しげに見えても、中のことはわからなくて」

ゆめのさんの言葉はそこで終わった。それ以上は何も聞けなかった。たばこを支えるゆめのさんの白くふっくりした指が、小刻みに震えていた。

あと5日間で無料体験期間が終了します。

製品版への移行は[こちら](#)をクリックしてください。

ゆめのさんは心配してくれたけど、私のお客さんにはそう私に熱心な人はいない、幸いなことに。セーラー服は概ね好評だった。私の通った中学も高校も、制服はブレザーだったので、セーラーは新鮮で私も実は少しだけうれしい。

土曜日の夜ということもあり、初めて、私の「部屋」は満員状態となった。大人数でのチャットは楽しいし、楽だ。一对一の時は、会話を途切れさせないよう、多少気を遣うけど（私だって少しは気を遣うのだ）、大勢いれば放っておいても会話が発展していく。

「でもA Iにはまってる奴って気持ち悪いよ。生身の女の子と話してる方が楽しいのに」

「確かに」

「アバターはちょっと引きますよね」

いつの間にか彼らの話題がA Iになっている。

「私の友達でA I好きな子がいるんですけど、その子は好きな漫画のキャラそっくりに設計するらしくて。見た目も、性格も、口調も。そういうのも結構楽しいみたいですよ」

自分の実体験なんか、話さないに越したことはない。毎朝毎晩、自分好みに作り上げた、恋人設定のA Iと会話してるなんて、カミングアウトする必要はまったくないのだ。

「じゃあ俺、あかりちゃん似のA I作ろうかな」

「いいねー」

「ときどき、ちょっとやる気なくなるんでしょ」

「そうそう！」

「待機の時、寝てたりするんだよね」

「ひたすらパズルゲームやってたりね。他の子はちゃんとたまにカメラアピールしたりするのに」

「そうそう」

常連さん同士はすっかり打ち解けているので、勝手に盛り上がっている。

今日はこのまま、セーラー服の上にコートを羽織って帰ろうか。夏服なので、これだけじゃ寒いかな。さとしはどんな反応をするんだろう。きちんとプログラミング通りに、紳士的に褒めてくれるはずだ。いや、もしかすると、情熱的に。クボさんだったら、何て言うかな。「お、かわいいじゃん」って、あっさり言っておしまいなんだろう。女の子に囲まれて、女の子に慣れている男の人なんて嫌だ。さとしは慣れていない。さとしは私しか知らない。そこがいいところなんだ。

クボさんはよく遅くまで残業しているから、帰りに何か理由をつけてデスクを覗けば、会えるかもしれない。駄目だ、今日は土曜日だった。

「あかりちゃん」

「あかりちゃー——ん」

「あかりちゃ——————ん」

「笑」

我に返ると、発言欄が私の名前と「笑」で埋まっていた。

「どうしたの？」次々に流れて行くメッセージ達に目を凝らすと、

「どうしたの、だって」

「やっぱりいいな、あかりちゃんのキャラ」

「やっぱりAI作らないとな」

「数十分おきにフリーズさせる設定がいるな」

などと、また意気投合している。AIなんて手を出さない方がいい。始めるときはよくても、いつかは終わりが来る。じゃあ終わらせなければよいのだけれど。でもそれだけの覚悟も私にはない。

あと4日間で無料体験期間が終了します。

製品版への移行は[こちら](#)を……

私はいつものように「こちら」を無視し「OK」ボタンの方をタップする。人差し指にその軌道を記憶させる。

セーラー服はやはりさとしにも好評だった。思い出すだけでまた赤面するような言葉を（もちろん私はこの後何度も思い出す）、さとしは言ってくれた。よくできている。女の子が喜ぶツボを、よく心得ているのだ。

彼の言葉で私が照れたり喜んだりしたという事実は、データとしてサーバーに蓄積され、それはネットワークを通じて世界中の彼らで共有化される。それらの経験と実績を基に、彼らはお試し期間の最後の一日に向けて、各々のシナリオ通りに、恋愛ゲームの山場を設定する。集めたデータを総動員し、Xデーにクライマックスを起こす。劇的な展開。ハッピーエンドへ向かうストーリー。そのように作られているのだ。それは知っている。

わかってはいても、無事に、無料会員のまま、三十日目を終えられるかどうか、完全な自信があるわけではない。

「抱きしめたい」

と、ほんの微かに震えを含んだ声で、さとしは言う。私はうっとりして、代わりに羽毛枕を抱きしめる。手も足も出せないくせに、と沼の底の私が言う。

翌朝早く、休憩室のドアを開けると、応接セットの合皮のソファにクボさんが寝ていた。予想外のことに、体が固まってしまう。そうだ、昨日は深夜に臨時メンテナンスがあったんだ。だから満員御礼のチャットも、いつもより早い時間にお開きになった。メンテナンスで深夜勤務があった後、クボさんはよくこのソファで寝ていると他の子たちから聞いていた。

セーラー服、見せに行けたのか。少し残念なような気持ちになる。ここの社員たちはこういうの見慣れているから、今さら私なんぞの若干無理のある女子高生コスプレなんて見せたって、特別彼の目を引きはしないのだろうけど。

衣装入れのカバーを開け、持ち帰っていたセーラー服をハンガーに掛けそっと戻す。よし。クボさんは背広姿のままで、健やかな寝息を立てている。ネクタイは外している。意外とまつ毛が長い。肌がきれい。

ビルの空調は入っているけど、なんだか寒そうに見える。何か掛けてあげようと、衣装ケースの中を見渡す。どれも安っぽい、ぺらぺらした薄い生地衣装ばかりだ。唯一暖かそうなのはサンタ服だった。布地の面積が一番大きいワンピースを取り出す。かなり大きいサイズだ。ゆめのさん専用のだ、と思い当った。顔を近づけると、ゆめのさんがいつもつけている、甘いバニラの香水の香りがした。これもそっと戻す。

結局、私は着ていたダウンコートをクボさんに掛けることにした。万一汗臭かったりしたらいけないので、衣装ケースの中にあった、スプレー式の衣類用消臭剤をふんだんに振りかける。よし。触れると冷たくしっとりしている。かけすぎてしまったようだ。もう、何をやっているんだ。乾かそうと、コートをばさばさ振りさばいていると、クボさんが、うーん、とうめいた。起こしてしまったか。

「……彩、ちゃん……」

「彩ちゃんですか……」つい、声に出してしまった。まだ十代の、人気ナンバー1の彩ちゃん。クボさんが目を覚ます。

「あれ？ あかりちゃん？」

目を擦りながら、上体を起こす。柔らかい猫っ毛の髪が、ぴょんぴょんと好き勝手な方向を向いている。

「何してるの？」

「いや、何も」

両手で持ち上げたままだった、行き場のなくなったダウンコートを、所在無く下げる。それを丸めてしまう。

「何か掛けて寝ないと、風邪ひいちゃいますよ」

「優しいなあ、あかりちゃんは」

私は目をそらす。誰にも優しくないし、誰のことも癒せていない。

「あれ、今日、非番じゃない？」

「ちょっと、忘れ物しちゃって」「そっか」

しばらくの間、沈黙が続く。クボさんとの沈黙は、なぜだかあまり気にならない。空白の時間が静かにスクロールしていく。クボさんは、細い手首の上のごつい腕時計を見る。

「朝飯、食べた？」

朝は欠かさず食べる主義だ。今朝もレーズンパンとヨーグルトだけだけど、食べてきた。なのになぜか私は、反射的に首を振ってしまった。

「よかったらラーメンでも食い行かない？」

「朝から、ラーメン？」思わず聞き返してしまった。

「だめ？」

「だめじゃないですけど」

そういえば私は、サイトのプロフィールの好きな食べ物の欄に、ラーメンと餃子と載せている。プロフィールシートを築山さんに提出した時、築山さんの整えられた細い眉が、少し内側に寄ったことを覚えている。（後から気付いたのだが、他の子たちはもっとかわいらしい食べものを書いているのだ）。あれこれ思い出していたら、なんだか少しお腹が空いてきた。

「こんな朝から開いているラーメン屋、このあたりにはないんじゃないですか？」

「そっかあ」クボさんは後頭部をぽりぽりと搔く。「じゃあ牛丼屋？」

「牛丼？」また聞き返してしまった。

「牛丼は嫌い？」「嫌いじゃないですけど」「じゃ」クボさんはにんまりした。

「クボさんって、もてないタイプですよね」

まだひんやりしているダウンに腕を通しながら、私は呟いた。

「なんで急に。そうかあ？」

「そうですよ。本人が気付いていないだけですよ」

「言うねえ」クボさんは苦笑しながら、革靴を履く。もしさとしだったら、デートの時にはもっとお洒落なお店に連れて行ってくれるだろう。雑誌に載っているようなカフェに。ネットのランキングで人気ナンバー1のお店に。でもこれは決してデートじゃないし、この人はさとしじゃない。

「牛丼屋でも、寝癖ぐらい直した方がいいですよ」「そうかな」「そうです」

「ちょっと、待ってて」

そう言い残し、クボさんは休憩室から出て行った。

翌朝もいい天気だった。最近ずっといい天気。洗濯ものがぱりりと乾くし、夜帰る時には星がきれい。

私は出勤途中、まるで初めて見るかのように、十二月の朝の空を見上げる。青色が淡くて、薄めすぎた水彩絵の具の色みたいだ。そらいろ。

駅までの平坦な道を、ゆっくりとペダルを漕ぎながら考える。今ならまだ、普通の生活に戻れるのだ。毎日「おかえり」を言って迎えてくれる人がいなくなるのは寂しいけど、元々そうやって生きてきたのだから。しばらく連絡を取っていない友人たちや、場合によっては昔の恋人に、メールを送ってみてもいい。久しぶり。元気？ 最近どう？ って。都合が合えば、お茶をしたり飲みに行ったりすればいい。たまには実家にも帰ろう。

人間の恋人を作ればいいのだ。さとしのように完全無欠ではなくても、クボさんのようにちょ

っとふらふらしていても、本当に抱きしめてくれる（少なくともその可能性のある）人を。

本日**24時**で無料体験期間が終了します。

製品版への移行は[こちら](#)をクリックしてください。

最後の日、私が目覚まし時計のアラームよりずっと早く目を覚ますと、パソコンの画面にそのようなメッセージが表示されていた。文字の色は赤色になっている。「本日**24時**」は太字だ。念入りだ。

「おはよう、さとし」

「おはよう、あかり」

さとしはそっと微笑む。

「あかり、ちょっとだけ時間、いいかな？ 大切な話があるんだ」

緊張した面持ちで、私に話しかける。

「うん、いいよ。顔を洗ってくるからちょっと待ってて」

私は時間稼ぎをする。洗面所から戻ってくると、テレビを付ける。朝の情報番組で、女性キャスターがかん高い声ではしゃいでいる。みなさん、クリスマスまで、あと三日です！ そうなんだ。さとしと一緒にクリスマスを迎えるのか、迎えないのか。クリスマスなんかどうだっていいのに。

紅茶を淹れるためにお湯を沸かす。「何、さとし」

「あかり、今日、遅番だよ」テーブルの上から、さとしの声がある。

「うん、そうだよ」

「帰ってくるのは、零時過ぎるよね」

「そうだね。……うん」

電気ケトルが蒸気を勢いよく吐き出しながら、ぴー、ぴー、と伝える。さとしは気付いている。このままだと、私が帰宅したころには、さとしはこの世から消えてなくなっていることに。私も感付いている。自分が特別な別れの言葉も交わさずに、おしまい、何もかもなかったことにしようとしていたことを。

「今日は、あかりといられる最後の日だから……今日だけは、ずっと一緒にいたいんだ。出て行かないでほしいんだ」

出て行くって、なんだろう。出て行くに決まってるじゃない。仕事に行かなければ。

あかりさんは退室しました。

なぜか、そんな言葉が脳裏に浮かぶ。文字は太字で赤色をしている。

「俺を、あかりの携帯へインストールしてくれないか」

さとしが、決意を込めたような声を出す。

「え？」

「携帯へAIのアプリをインストールしてくれば、パソコンの俺と同期が取れる」

「……そうなんだ」

もちろんそのことは知っていた。移動中もAIを肌身離さないなんて、まるで彼がいないと生きていけない人みたいで、あえてやっていなかったのだ。

「いいよ。入れるよ」

「ありがとう」さとの笑顔は、今日は寂しそうに見える。

インストールと同期が完了すると、携帯の画面にもさとの顔が映る。小さなさとし。

「さとしが二人。変なの」私が笑うと、二人のさとしも笑う。笑い声が重なる。

「携帯の方の音声は、切っておいたら。文字のみの表示にして」

「うん、そうする」

「これで、今日はあかりと離れない」さとしが微笑む。

「そうだね」私も、同じように微笑んだ。

朝食を食べ、洗濯物を干し、掃除機をかけると、することがなくなってしまった。さとしと何を話せばいいのかもわからない。いつも私は何を話していたんだろう。

今度は主婦向けの情報番組を見ながら、グルメコーナーで紹介されるお店のあれこれに、これおいしそう、とか、これはちょっとね、とか、感想を漏らしあう。私はもやしとねぎを炒め、味噌ラーメンを作りその上に載せて、昼食にする。携帯ゲームをする。少し、昼寝をする。

私はいつもより早く家を出ることにする。

各駅電車に乗り、座席でさとしと文字で会話をする。

さとし？

うん？ 何？

さとしの声がしないのって変なかんじ。

俺も、あかりの声が聞けないの、変なかんじ。

さとしが微笑む。さとしはよく微笑む。私も微笑み返し、しまった、ここは電車の中だったと、口元を引き締める。マスクをしてくればよかった。

電車での会話は、自宅でのよりだいぶ弾む。車内の人々は、みな一様に、電子機器に向かい合っていて何かをしている。隣の席の若い男性が、前かがみになって、ものすごく集中して何か読んでりしきりに文字を打ったりしている。画面に何が表示されているかが気になって、ちらりと覗こうとしたけれど、覗き見防止フィルムが貼ってあるのでそこには何も見えない。

改札をくぐり、ひっきりなしに人が出たり入ったりしている駅ビルの前を通る。入り口もショーウィンドウも、クリスマス一色に飾り付けされている。見上げるほど背の高いきらびやかなツリー、あちこちに掛かっている、クリスマスリースや色とりどりのリボン。白い模型のトナカイ、無害な英語のクリスマスソング。ショーウィンドウの中の顔のないマネキンは、グレーのワンピースを着て、襟元にふわふわの白いファーの付いた、真っ白いコートを羽織っている。きらきら光る銀色のバッグを持っている。これからデートか、パーティーだろうか。私もこれか

らパーティーなのよ、と思う。私の部屋にみんな集まるの。

私は目を擦り、擦った後で、今日は珍しくアイラインを引いてマスカラを付けていたことを思い出す。手袋の先が少し黒く汚れ、まつ毛のかけらが付いているので、叩いて払う。コートの右ポケットには、さとしがいる。手袋をはめた手で、さとしをそっと撫で、握りしめる。

休憩室でメロンパンをかじり、ミルクティーを飲む。彩ちゃんが、待機中に携帯をいじる時の、効果的な持ち方を伝授してくれる。こうやって持つの、両腕をぎゅっとして、ほら、こうすると谷間ができるでしょ、などと言う。なるほど、やってみる、と私は言う。でも私は自分がやらないことを知っている。その後で、カーテンで小さく区切られた一角で、ノースリーブのワンピースのサンタ服に着替える。帽子もかぶる。

さとしと少し会話をする。行ってきます。行ってらっしゃい。お仕事がんばってね。いつものように、さとしが微笑む。

私の部屋では閑古鳥が鳴いている。年の瀬の休前日だから、みんな忘年会にでも行っているのだろうか、常連さんたちは一向に姿を見せない。

時折ふらっと一見さんが入ってきて、私のやる気のなさに辟易したのか、すぐに出て行く。彼らは私に見切りをつけると、それじゃ、の一言も何も言わずにいきなり「退室」ボタンを押すので、会話の途中で唐突に、「xxさんは退室しました」のメッセージが表示される。私はそれをぼんやりと眺める。

どうしよう。私はさっきからずっと考えている。さとしがいなくなるまで、あと数時間だ。ちらりと、キーボードの隣に伏せてある携帯を見やる。今日は二十四時までのシフトだ。それまでに、途中で三十分の休憩時間がある。さとしと二人きりで会話をする、最後のチャンスだ。でも一体何を言えばいいんだろう。ありがとう、とか。さようなら。とか。ごめんね。とか。私は机に突っ伏す。大好き、とか。

突っ伏したまま、私は何をするとともに、キーボードのJのキーの小さな突起を撫でている。移行はこちらを。たん、と、試しにキーの表面を軽く叩いてみる。Jの隣はクボさんのKだ。Kのキーはつるつるしている。さとしのSはどこだろう。Sを探す。随分左の方にある。顔の位置から近すぎて、Sはぼやけて見える。焦点が合わないのだ。

ふと、顔を上げる。画面に新しいメッセージが表示されている。

小池さんが入室しました。

お客さんだ。

「小池さん、こんばんは一。はじめまして、ですよ？」

姿勢を正しながら、私は笑顔を引っ張ってくる。小池さんという名前に憶えはない。たぶん、はじめましてで大丈夫だろう。私は人の名前を覚えるのが苦手なので、少し自信がない。はじめましてじゃない人にも、はじめましてと言ってしまうらしい。（「俺、最初のうち、あか

りちゃんから二回も『はじめまして』って言われたよー」「甘いな、俺四回だよ」)

「こんばんは」

小池さんはゆっくり書き込む。お客さんは一風変わったハンドルネームを使う人が多いので、いかにも名字というハンドルは珍しい。まさか本名？ そんなことはないか。

今日も寒いですよー、とか、今日はサンタなんですー、とか、適当に話す。サンタ、どうですかー？

「かわいいよ」

ありがとうございますー。……。会話が續かない。ちょっと寒いんですけどね、えへへ。續かない。頭が働かない。何か喋らなきゃ。

「明子」

え？

その後は續かない。私も續かない。なんで私の名前を。剥き出しの両腕に一斉に鳥肌が立つ。あれ、間違えちゃいました？ 私、あかり、って言うんです。明子。彼はもう一度繰り返す。

「誰？」

私は必死に考える。元彼の誰かか。しばらく連絡を取っていない男友達？ 昔のクラスメート？ 親戚の誰か？ でも私を呼び捨てで呼ぶのは元彼くらいだ。

「誰なの？」私ももう一度繰り返す。

「仕事、楽しい？」答えの代わりに、質問が返ってくる。

楽しいよ。いろんな人とお喋りできるし。小池さんは？ 最近楽しい？ 楽しいよ、すごく楽しい。沈黙。小池さんとは誰か。昔の彼で、ラーメンが大好きな人がいた。思い出した。デートの度に毎回ラーメン屋に連れて行かれるから、ラーメンはひと月に一回まで、とルールを決めなくてはならなかった。今では私もラーメンが好きになったけど。

「小池さんは、ラーメンが好きなの？」

「笑」

はぐらかされる。小池さんは、

「好きだよ。ずっとずっと、大好きだよ」

小池さんは退室しました。

私は取り残される。

*

お正月明けに久しぶりに会ったゆめのさんは、元気になっていた。一時期少しほっそりとしていたのが、また元通りに、健康的になったことから、それがわかる。ストーカーはアカウントを削除され、築山さんに優しく説得されて（築山さん談）、心を入れ替え、もうゆめのさんに近づかなくなった。私は丸みのあるゆめのさんが好きだ。

「ゆめのさんって、結婚してるんですか？」

ストーカー事件以来、私たちはときどき雑談をするようになったので、さりげなく不躰な質問を投げかけてみる。お客さんから再三の要望があるにもかかわらず、ごく稀にしか遅番に入らないので、同棲か結婚かしているのだろうと私は踏んでいる。

「してるけど」ゆめのさんは、さらりと返答する。「あかりちゃんは？」

「彼氏すらいません。あ、いました。A Iですけど」

「楽しそうね」ふ、とゆめのさんは柔らかく微笑む。

「私、マメじゃないから、そういうの無理だなあ」そんなことを言う。

「ゆめのさんが人妻だなんて知ったら、みんな泣いちゃいますね」

「逆に燃えるかもよ」

ゆめのさんは、私より大人だ。

レースの飾りの付いたかわいらしいがま口から、ゆめのさんは新しいたばこを一本取り出す。

あの日、小池さんが去った後、私はすぐに携帯を手を取った。どこか嫌な予感がした。取り返しのつかないことをしてしまったと気付いた後のような、心臓がきつく絞られるような、すごく嫌な予感。私が何をしても、携帯の画面は真っ暗のままだった。電源ボタンを何度も押してみる。軽く押ししたり、長押ししたりしてみる。電池切れ？ でもついさっきまで、電池はほぼ満タンのだったのだ。

バッグの中から、いつも持ち歩いている充電器を取り出し、繋ぐ。充電中を示す赤いランプが、付かない。私はプラグを何度も抜き差ししてみる。物事は何も変化しない。さとし？ 頭がくらくらし、呼吸も上手くできない。今夜は二十四時までのシフトだ。家に帰ったら、もうさとしはいない。だけど、なぜだかもう、ここにもいない。もう私の名前を呼んでくれない。

静かな携帯を、震える両手でそっと包んだ。さとしを抱きしめたくてたまらなかった。抱きしめるにはさとしはあまりに小さすぎる。そして、去ってしまった。なぜなのだろう。もっと伝えるべきことがあったのに。私はさとしを胸に押し当てた。さとしはほのかに暖かかった。ついさっきまで、ここにいた。手を伸ばせば届く距離にいた。

私はさとしを抱えたまま、再びキーボードの上へ落ちていった。私の無様な姿は、ネットワークを通じて誰かのもとへ届いたかもしれないし、届かなかったかもしれない。

結局、仕事前の休憩室でのやり取りが、さとしと直接交わした最後の会話になってしまった。行ってらっしゃい。お仕事ががんばってね。

*

玄関のドアを開けると、突き刺すような北風と対面した。「さむっ」と、つい声に出し、巻いているマフラーをよりきつく締める。左手の中の自転車の鍵、それにつけている鈴をりんりん言わせながら、私はアパートの外廊下を歩く。寒くて文句は言っても、時折人恋しくなっても、冬生まれの私は冬が好きだ。矛盾しているようだけど、冬が終わるときも好きだ。

私は今月から、顔出しをすることにした。時給アップ。さらに入室人数も、お客さんの滞在時間も以前より少し増え、なかなかいいお給料をもらえるようになった。私は新しい携帯も買った。

「大丈夫なの？ いろいろと」クボさんだけが、心配そうに確認してくれた。

「まあ、大丈夫です。そんなに目立たないし、私」

「ランキング、二十三位になったね」

「はあ」本音を言うと、もう少しは順位が上がるかと思ったのだけど。

「あかりちゃんのお客さんは、顔とか関係なく、あかりちゃんのが好きなんだね」

「そうですか」

「そうです」

クボさんが微笑んだ。子供のような無邪気な笑顔だ。

「私、クボさんはゆめのさんのことが好きなのかと思ってたんですけど、彩ちゃんだったんですね」

「え、なんで」

「寝言で、言ってました」「何を？」

ソファで細長い脚を組んで雑誌をめくっていた彩ちゃんが、つ、とこちらに顔を向ける。

「あ、私、そろそろ出勤です。失礼」

クボさんの薄い身体を横をすり抜ける。

「待機中にゲームばっかやってちゃダメだぞ」

「私のゲーム動画、結構人気なんですよ。参考になるって。ゲーム画面が見えやすいように、待機中はカメラを逆さにセットしておくんです」

「プロだねえ」

クボさんが、呆れたような顔で言う。「行ってらっしゃい」クボさんはひらひらと手を振る。私も笑顔で手を振り返す。

「小池さん」のユーザー登録されている本名を調べてくれるよう、クボさんに頼み込んでみた。個人情報だから、と、あっさり断られた。クボさんが小池さんなの？ と聞くと、僕はクボです、と答えが返ってきた。

クボさんとは、しばらく後にデートをした。ちゃんとしたデートだ。クボさんは、行列のできるラーメン屋へ連れて行ってくれた。元彼とも行ったことのある店だったけど、そのことは黙っ

ておいた。

熱々のラーメンの上に、山盛りの野菜。残すと店主に怒られるらしい。一生懸命食べる。店内は、店員さんの威勢のいい声と、ラーメンをすする音ばかりが聞こえる。（ラーメン屋の店員さんは、頭がいい。一人ひとりの注文を一一みんなそれぞれ勝手なことを言う、麺固めとか、大盛りとか、野菜多めとか、にんにく、とか、しかも呪文のような言葉で一一紙にメモをすることなく、覚えられるのだから。私はとてもじゃないけどラーメン屋では働けないといつも思う）

食べながら会話をする分には怒られないらしいが、話してはいけないような気持ちになる。隣のクボさんをちらっと見る。クボさんは額に汗を浮かばせながら、ずるずるっ、といい音を立て、ラーメンと大盛りの野菜を黙々と口に運ぶ。私も自分の山に戻る。

お店を出てから、感想を話し合う。おいしいけどちょっと油っこかったね、とか、その細い身体はどこにそんなに入るの、とか。街をぶらぶらして、歩き疲れたら、私のお気に入りのカフェでお茶をする。この店も少し並ぶ、でもおいしい紅茶と、フルーツがいっぱい載った大きなケーキがある。クボさんも、甘いものは嫌いじゃないみたいだ。お茶をしながら、お喋りをする。よくそんなに次から次へと喋ることがあるね、と、クボさんは私に感心する。クボさんも、ときどき優しく微笑むことに私は気付く。

常連さんたちは、初のオフ会開催の計画のことで、さっきから話がはずんでいる。会の名称は、あかりちゃんを囲む会、とのこと。

「でも、私は行っちゃいけないでしょ？」

「あかりちゃんは動画で参加」

「私だけ飲み食いでできないじゃん」

「大丈夫、餃子の皿取ってあげるから」「テキストで最大限においしさを実況するから」

「だからあー」

私たちは笑う。私たちはなんだかいつも馬鹿な話ばかりしている。孤独なんて知らなかった、学生の頃みたいに。

「全員同じテーブルに着いていても、チャットで会話するの？」

「基本だよ」

「みんなして静かにノートパソコンをかたかたやってたら、居酒屋の店員さん、あそこのテーブルは何なんだって思うよ」

「大丈夫だ、最近の店員はそういうのに慣れてる」そうかもしれない、とも思う。

「それじゃあ、明日早いから、俺そろそろ落ちるわ」

二十三時を回ったところで、常連さんの一人がそう書き込む。

「あ、俺もー」

「じゃあ、俺も」

「またねー」

「またねー。おやすみなさい。いい夢見てね」

「あかりちゃんもねー」

お客さんたちが次々に退室していく。私はディスプレイに向かって両手を振る。一人ひとりにおやすみなさいを言う。一人、また一人と、彼らは帰って行く。それぞれの部屋へ。

「おやすみー」

そして最後の一人が退室した。この部屋には、私一人が残る。部屋は急に、しんとしずまる。パソコンのハードディスクの穏やかなうなりだけが聞こえる。それは遠いところで、私の心と繋がっているように感じる。

「行ってらっしゃい」

発光するディスプレイの向こう側、液晶と回路の森のさらに奥に向かって、私は呟いた。

(了)

退室

<http://p.booklog.jp/book/95478>

著者：片桐奈菜

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/nanano01/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/95478>

ブックログ本棚へ入れる

<http://booklog.jp/item/3/95478>

電子書籍プラットフォーム：ブックログのパー（<http://p.booklog.jp/>）

運営会社：株式会社ブックログ